暴力論 第二回

光枝 初郎

ルー 第二回からいきなり主テーマの ズの哲学についての話題である。 「暴力」とは離れることをお詫びしたい。 今 回 は、 ドゥ

器官なき身体と存立平面 準備考察

題設定―器官なき身体 -両者の関係-存立平面-

されているとは言い難い現在の研究状況も影響している。 れ、『千のプラトー』において登場し、『哲学とは何か』4でも引き続き内容が語られている。 するところはまちまちである。「存立平面」は「内在平面」や「構成平面」とも言いかえら 決してこの言葉を一義的には使用していないため、現在に至っても論者によってその意味 論理学』「において初めて登場し、その後フェリックス・ガタリとともに書かれた『アンチ・ 必ずしも理解されていないように思われる。その理由としては、そもそもこの二つの概念 オイディプス』²と『千のプラトー』³で内実が広大に語られた。 官なき身体」も「存立平面」も、 ように私には思われるが、その理解が難しいのは『哲学とは何か』への参照がまだ十分に の把握そのものが難しいということが挙げられる。「器官なき身体」という言葉は『意味の しかしその両者が具体的にどのような関係で位置づけられているかということについては、 「存立平面」はドゥルーズ哲学を体系的に理解しようとする時の一番の重要ワードである 本論では、「器官なき身体と存立平面はどのような関係にあるのか」を明らかにする。 共にドゥルーズ(=ガタリ)が示した著名な概念である。 後にも述べるように彼らは

を第三節において確認したうえではじめて、第四節で後期ドゥルー び上がらせる方法が一つには考えられるが、本論では第二節で『アンチ・オイディプス』 「器官なき身体」と「存立平面」の内実をそれぞれ明らかにしたうえで両者の関係を浮 「器官なき身体」を先に確認し、それから両者の関係が述べられる『千のプラトー』 ズが切り開いた「(存立)

ゥゥゥゥ ルルルルル -ズ=ガタリ著、-ズ=ガタリ著、-ズ=ガタリ著、 タリ著、財津理訳(河出書房新社)、1997年。タリ著、宇野邦一、小沢秋広他訳(河出書房新社)、タリ著、市倉宏祐訳(河出書房新社)、1986年。岡田弘/宇波彰訳(法政大学出版局)、1987年。

器官なき身体

界観は次のセンテンスに要約されている。 は世界の記述において、欲望の生産といった一元的な捉え方を提出する。 『アンチ・オイディプス』の第一章は 「欲望する諸機械」であるが、 ドゥルーズ=ガタ その彼らの

ある。 動する。ということは、ここには常に流れを生産する機械と、この機械に接続され 欲望する諸機械は二項機械であり、二項規則 の流れを切断し採取する働きをするもうひとつの機械とが存在するのである。 ひとつの機械は常に他の機械と連結している。生産的総合(すなわち、生産 「これと」(et) 「これの次にあれ」(et plus...) という接続的な形態をもって作 (つまり、連合的体制) の下にある機 の生

ある。 こうして、 欲望の生産は、自らの過剰性そのものによって、「反生産 (anti-production)」を生み出す。 もとでは、「死の本能」も同時に作動する(「死の本能、これがこの身体の名前である。」。)。 ける身体」が何か肯定的でそれも生をポジティヴに捉えたかのようなものを指していると 上手く機能する限りにおいて「生ける身体」として世界を過ごす。ここでポイントは、 になる。「器官なき身体」の様子をみてみよう。 いうことである。そして、それとは別に、とこの哲学者たちは続ける。この連合的体制の ここでいう欲望は、あるものとあるものをつなぐ、 そして、例えば私たち人間のような有機的身体は、この連合的体制の下において、 器官の正常な作動によって自らの生を謳歌する身体とともに、押しつけられた 器官の不調においてうめき声をあげる「器官なき身体」が生産されること 「連合的体制」のもとでの作動原 生

を味わっている。器官機械に向けて、器官なき身体は滑らかで不透明で張りつめた自ら は身体の敵なのだ」。 はそれだけであり/器官など必要としない/身体はけっして有機体ではない よってこの身体を台無しにし、窒息させる神の行為を嗅ぎつける。「身体は身体だ/身体 器官なき身体は、 表面を対抗させるのである。 諸々の器官の下に忌まわしい幼生や幼虫を感じ取り、有機的組織 その肉にはこれほどまでに釘が打ち込まれ、これほどまでの責め苦 7 /有機体と

て述べられたことである。 「器官なき身体」の名前が死の本能であるというのは、『アンチ・オイディプス』におい 私たちは後の 『千のプラト 』においてそれがもう少し複雑な

^{7 6 5} 『アンチ・オイディプス』r 『アンチ・オイディプス』r

pp. 20°

議論になることを確認するのであるが、 ニュアンスを持つ 「死」という出来事と隣り合わせであることを理解すればよい。 ひとまずここでは「器官なき身体」は時に否定的

第三節 両者 の関係

ことができよう。 である。しかしここで何よりも確認しておきたいのは、「器官なき身体」という概念が『ア トルからも伺えるし、 ンチ・オイディプス』期よりもはるかに発展しているということである。それはこのタイ -』の第六章「一九四七年十一月二十八日-「器官なき身体」と「存立平面」との概念の交錯が本格的に論じられるのは、 次のようなセンテンスにドゥルーズ=ガタリの問題設定を読み取る -いかにして器官なき身体を獲得するか」 『千の プラ

ではないか。なぜこのような例ばかり見、なぜこうした例を通過しなければならない 列は、何ゆえなのだろうか。 たのか。。 で縫われ、 満ち足りているのではなく、 ガラス状になり、 器官なき身体は、快活さ、恍惚、 緊張症になり、 空っぽになった身体たち。 吸い込まれてしまう身体のこの いったい何が起きてしまっ 舞踏にも満ちているはず 陰惨な行

満ち、 するのは、大変困難なのである。 かの区別があることを発見する。 死」という出来事と常に隣り合わせである「器官なき身体」を私たちが獲得しようと 陰鬱、 惨劇である。 「死の本能」によって突き動かされるその身体は、 ここから、 ドゥルーズ=ガタリは器官なき身体にも幾 苦痛に

のような区別を設けよう。

- もっている。これは減退(remissio)である。 なき身体の寒冷、マゾヒストの器官なき身体の責苦。それぞれが産出の原則として零度を (一) タイプ、種類、実体的属性として区分される器官なき身体、 例えば麻薬による器官
- 器官なき身体を貫く波と振動。これは度合(latitudo)である。 (二) それぞれのタイプの器官なき身体に発生する事柄、 つまり様態、産み出される強度
- (三) あらゆる器官なき身体が場合によって形成する全体、存立平面。これは実在性の全 であり、これ自体が器官なき身体と呼ばれることもある。10 (傍点筆者)

意すべき類型は $\widehat{}$ のタイプである。 ド ウ ル ズ=ガタリはヒポコンデリー の身体、

pp. 205 も参照。 小林徹『経験と出来事 メ ル 口 ポ ンティとド ゥ ル ズにおける身体の哲学』(水声社、 2014)

⁹⁹

[『]千のプラトー』

それぞれはこの区別 ラノイアの身体、 て彼らは次のような診断を下すに至る。 分裂症の身体、麻薬中毒者の身体、 (一) のタイプの 「器官なき身体」 マゾヒ であると考えられる。 ストの身体を挙げているが それらに 0

けでなく、 有機体と呼ばれる器官の組織に対立する器官なき身体があ でなく、有機体の外へと逃走するため、存立平面の上に「別の」器官なき身体を作る細胞を元に戻し、再び地層化しなければならない。それは、自分が生き延びるためだ めにも必要なのだ。二(傍点筆者)でなく、有機体の外へと逃走するため、 ものに属する有機体の器官なき身体も存在する。 狂気となり、 増殖し、 形態を失い すべてを食い 癌組織がそれだ。 るのは つくしてしまう。 確かだが、この 刻一刻、細胞は癌 有機体はこ 地層

身体は避けられなければならない。 なき身体といえども、道徳や有機体組織の渦である地層の運動に巻き込まれてしまい、す ことなのであるが、器官なき身体 るとそれは彼らが目指したような身体の在り方でなくなるのだ。(一)のタイプの器官なき 死に至る。こうした身体をドゥルーズ= の引用でも分かるように器官なき身体の最大の特徴 の運動の方法を間違えてしまうとそれは癌組織となり己 ではどうすればよいか。 ガタリは地層化といった用語で説明する。 は 「有機体組 織を敵とする」

身体たち=存立平面〉 身体の集合、 語られるのであるが、ここで存立平面の構成要素として配置されている器官なき身体は、 ヒント (一) の身体とは別ものだと考えなければならない。「存立平面は、あらゆる器官なき - は区別の 純粋な内在性多様性であ」いる。このとき、ドゥルーズ= (三)にある。 とでもいったようなものを構想している。 ここにおいて器官なき身体と存立平面との関係が初めて ガタリは 〈器官なき

のものを産出する器官なき身体は、 のことであり、その質的差異のぶんだけ事物の多様性が在る。そのとき、 の原理としての強度零である」13。 それぞれの器官なき身体が存立平面を構成している限りにおいて、「器官なき身体は卵で ……卵は純粋な強度の場であり、内包的空間であって、外延的延長ではない。 ここで述べられている強度とは事物が有する強さの度合 事物そのものの構成原理なのである。 そうした強度そ 清算

する器官なき身体によって構成される存立平面とは、 私たちは今や、 身体の論理から、 存立平面の論理に移らなければならない。 果たしていかなるものなのだろうか。 強度を産出

存立平面

『哲学とは何か』からはじめよう。

¹¹ 12 『千のプラトー

⁻J pp. 187° -J pp. 181° -J pp. 188°

¹³

d'immanence) は、 ているのだ。必要なのは概念の弾性であり、さらに環境の流動性である。それら二つが ョーにかけて、思考に関する問題は無現速度にある。 クロスからスピノザにかけて(『エチカ』の驚嘆すべき第五部……)、スピノザからミシ いて無限に運動する一つの環境を必要としている。つまり平面、真空、地平を必要とし れわれがそれであるところの のである。14 いわば上昇したり下降したりする多様な波であるが、 それらを巻きこんだり繰り広げたりする唯一の波である。 「減速した存在 (etres lents)」を構成するために必要 しかし無現速度は、それ自身にお 内在平面 (plan

ることになる。 のアンリ・ミショ 減速」した存在とはどういうことだろうか。 ーの一連のテクストを論じながら独自の速度論をここで打ち出して 小林徹の整理」をによると、ドゥル -ズは詩

ミショーは自身によるメスカリン注射の実験で、 例えば次のくだりである。 自己の意識の変容へ の驚異的 な試みを

無数の収差に折り曲げられる一本の線だ。16(傍点筆者) はとりわけ、私が一本の線にすぎないということだった。ここではただ、一本の線鉄鋼のフライス盤の倦むことなき運動の下に置かれた鉄のように扱われた。(中略) ように、送風機の中の風のように、 人間的なも 破砕装置 \mathcal{O} の中に捉えられた。 中にではなく、 工場の中の金属素材のように、水力タービンの ある種の熱狂した機械的な攪乱装置の中に、 自動砕木機の中の木の根のように、歯車の歯を刻む ここではただ、一本の線だ。 中の水 恐怖

考の思考)。 していく。 =思考が飛躍するためにメスカリン実験を行ったその意義について、ドゥルーズは思考 ミショー 事態は休息していく。この一連の出来事を、ミショーは精神の試練として、 その後「手が旅行用ひざ掛けに触れた瞬間、柔らかく暖かい感覚が甦る」ことを覚え は自分が一本の線になるという恐るべき状況に立ち囲まれ、 むしろ彼は思考が思考であるための一切の条件を思考してい いよいよ危機に陥 くのだ つまり精

は常に新しさと新鮮さに満ちた経験を経なければならない。しかし、それ 麻薬中毒者の苦しみや、 り合わせである。そう、「死の本能」に裏打ちされたあの「器官なき身体」の経験のように。 「哲学とは概念の創出である」とは『哲学とは何か』の有名な一句であるが、その概念 マゾヒストの抱える痛み、 そしてミショー のメスカリン な常に 危険と隣

¹⁵

して アンリ・ミショー『精神の大試練小林『経験と出来事』pp. 283-98。『哲学とは何か』pp. 54。 代えた。 『精神の大試練』 の — 部であるが、 小林 『経験と出来事』pp. 279 の訳を引

るのである。17 ることであり、 の主人」に留まるということは、「小さな領地」を切り開き、 何 「微細な肉」を構成するに足るだけの何かを持ちかえらねばならない かを描くためには、 この〈平面〉の上で、はじめて作家/画家は自らの線を引くことができ 恐怖に満ちた〈線〉の絶対的速度の中で減速し、 滑らかな〈平面〉を構成す のである。「速度 反転し、 そこか 人」でなければならないのだ。思考のリズムをうまくコントロールできなければならない

私たちが思考を、精神を試練にかけるとき、私たちはあくまで「速度の主

しかし、ドゥルーズはここでちょっと待てというのである。

すなわち、

度の恐怖。

ڮ

なき身体」は後退し、あるのは事物だけでなく事物が たように思われる。 そのとき器官なき身体たち≒存立平面は、あくまで多様性としての事物の産出原理であっ その究極の に幾つもの線を引いたり消したりする画家は、すべてのことを為すことができるのである。 の無現速度の源泉たる、広大な平面しかない。その平面があって、私たち人間=自らの生 『千のプラトー』では、ドゥルーズ=ガタリは確かにこのことを予告していた。 そのときはじめて「存立平面」という巨大な立体が顔をのぞかせる。 「場所=環境」だけとなったのだ。 今や、『哲学とは何か』において、 「速度の主人」とさえもなるための 「死の本能」をちらつかせた「器官 もはや世界にはこ しかし、

器官なき身体から存立平面 $\overline{}$

考の焦点が移動するのを確認することによって、 年に書かれたが、私たちはここにおいて「器官なき身体から存立平面へ」ドゥル 切のフラクタルな場である。この場において私たち=世界内存在は、己の生を彩るものと もはや事物の多様性を超えて、 その器官なき身体が幾つも集まって構成されるのが存立平面である。 なき身体とは、多様性としての事物、 しての作家/画家たりえる。『千のプラトー』は一九八十年、 ったのが理解できよう。 「器官なき身体と存立平面はどのような関係にあるか」。結論は以下の通りである。 事物、私たちが「速度の主人」たることをも充実させる一 事物の多様性そのものの一切の産出の源泉である。 彼が特異な平面論と速度論を打ち出して 『哲学とは何か』は一九九一 しかし、 存立平面は、 ーズの思

参考文献

江川隆男『アンチ・モラリア 〈器官なき身体〉 の哲学』 (河出書房新社、

小 林 『経験と出来事』pp. 284-5°